地理学報告第95号1～19　2002

第2次世界大戦前の日本の都市地理学

阿部和俊*

I　はじめに

第2次世界大戦前の日本の都市地理学を整理することがこの小論の目的である。戦前の日本の都市地理学を整理したものとして，木内信蔵（1941a）「都市地理学に於ける二、三の問題と本邦都市地理研究の最近の趨勢」と同（1951）『都市地理学研究』，田辺健一（1975）「日本における都市地理学の発展―都市地理研究者の研究系譜を通して―」，山田誠（1979）「都市研究と地理学」があり，いずれも有益である。

田辺は，1920年代の日本の都市地理学を「この時期の初期には東西の地理学の先達がその専門外の都市に早くから興味を示していたことと，先駆者としての小田内通敏の活躍が見られたこと，田中啓爾が都市を集落地理学の対象としてではなく地誌研究の一節として取り扱ったことに特色が見出される」とまとめている。そして，1930年代前半のそれを「ここまでのものは，辻村太郎が主張した“文化景観の形態学”の影響を強く受けたものと，当時急速に進んでいた地域計測の流れをくむものと，国勢調査に職業別人口が初めて採用されたことからその統計処理を行なったものとの3種に分けられる。これらの研究方法はその後長く続くのではあるが，まだ都市を専ら研究の対象におく研究者はあらわれていない」とまとめた。1930年代後半には都市圏の研究の萌芽がみられたが，「いずれも，その後の研究継続が見られない」と述べている。

山田の論文は大学における地理学教室からときおこし，戦前の都市地理学の特色をまとめている。

筆者の整理を提示する前に，木内の整理を紹介しておこう（表1）。この表は「此處では昭和5年以降地理学関係刊行物（地理学評論，地学雑誌，地球，地理論叢，大塚地理学会論文集，地理，臺灣地理学記事，地理学，地理教育）の中より，オリヂナルな都市研究（内地及び関東州南洋を除く外地都市）を集成する。分類は独自の方法に依り，且其れへの所属は，標題の如何に拘わらず含まれる内容によって決定した」ものである。

この表によれば昭和5～15年の11年間に，都市地理学の論文は131本である。表の（註）g）にあるように，木内は都市地理学を広く解釈している。木内の分類によると最も多いものは「景観，形態，構造論」の論文（29.5本）である。これに「機能，経済，産業論」の21.5本が続く。

続いて筆者なりに戦前の都市地理学をまとめていこう。単行本と講座，雑誌掲載論文を資料として整理するが，まず後者の方からみていこう。筆者は「地理学評論」（日本地理学会），「地理」（大塚地理学会），「地学雑誌」（東京地学協会）をとりあげた。ところで，1つの論文が都市地理学であるか否かを判定することは意外にむつかしい作業である。筆者は論文のタイトルに注目した。論文のタイトルというのは著者の意図を明確に反映しているはずだからである。論文のタイトルに市名の入っているもの，あるいは都市と入っているも

*愛知教育大学地域社会システム講座

表1　本邦都市地理学文献統計

年次＼分類		景観，形態，構造論	機能，經濟，産業論	人　口	發達史過去の都市	自　然環　境	交　通	形式，都市化	地　誌	其　他	合　計
昭和	5	1.5	1	0	0	0	0	0	0	0.5	3
	6	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2
	7	1.5	0.5	0	0	1	0	0	3	1	7
	8	3	4	1	0	0	0	0	1	1	10
	9	3.5	4	3.5	3	2	1	0	1	1	19
	10	3	4	2	3	0	2	1	0	4	19
	11	4.5	0	0	1.5	0	0	0	2	2	10
	12	6	2	2	0	0	0	1	1	0	12 (15)(註)
	13	2	2	3	1	3	2	3	3	4	23 (25)
	14	1	3	2	1	4	2	1	2	1	17 (22)
	15	2.5	1	0	1.5	4	0	0	0	0	9 (13)
合　計		29.5	21.5	13.5	11	15	7	6	13	14.5	131

（註）a）分類法には疑問の點あらんも一應此の形に纒めた。
b）論文の所属は表題の如何によらず内容を以て分けた。
c）二項目に汎る時は0.5づゝを與ふ。
d）合計5未満の項目は其他の中に一括し，此處には分布論，方法論を含む。
e）本表は内地，樺太，臺灣，朝鮮都市の研究のみを集成す。
f）年次別合計の括弧内は大陸都市研究を加へたもの。
g）普通に都市地理と言はれる範圍より稍々廣くとつた。
（出典）木内信蔵（1941a）：「都市地理学に於ける二、三の問題と本邦都市地理研究の最近の趨勢」

のを都市地理学の論文とした。ただし，明確に農業地理，工業地理を目指しているものは除外している。そして，参考として集落地理，交通地理，人口地理の論文数も併記した。これらは都市地理学の隣接分野であると考えられるので，比較することによって，都市地理学の状況がより理解されると考えられるからである。

1945年までに上記3雑誌に掲載された都市地理の論文数を表2に示した。「地理学評論」では28本であり，これを点的分析，面的分析に分けると前者が8本，後者が20本である。とくに都市の内部構造を研究したものが多い。都市地理の28論文中5本が外国研究であることも興味深い。アジアのみならず，ドイツ（佐藤，1929）やフランス（西田，1930）の都市を研究していて，早くから都市地理学者が海外に関心をもっていたことがわかる。交通地理（6本），集落地理（7本），人口地理（16本）もかなり多いことがわかる。交通地理，人口地理においてもそれぞれ1本，3本の海外研究がみられた。

「地学雑誌」は自然地理学の論文が圧倒的に多いが，戦前において少数ながら人文地理学の論文もみられる。多いのは人口地理であり16本を数え，うち4本が外国研究である。3誌にみられる都市地理や人口地理の論文数の状況は以上の通りである。

Ⅱ　主要著作にみられる特色

「地理学評論」では都市の内部構造を分析した研究が13本で最も多い。この中には東京（佐々木彦一郎，1933，木内信蔵，1941b）や名古屋（鏡味完二，1937，1938，1939）のような大都市を対象とした研究もあれば，高田の景観（安田初雄，1939）や宮城県亘理町の内部構造（山口彌一郎，1935）のような小都市を対象とした研究もある。都市誌として分類した2論文も内部構造の解説が中心なので，これらも都市内部構造研究に含めてもいいかもしれない。

「地理」にも都市誌として分類される論文が2本あるので，雑誌論文にみる限り当時の都市地理は内部構造の分析を中心とした都市の全体像の提示に研究者の関心があったといえよう。森川洋

(1974) によれば，20世紀前半のドイツの都市地理学にも同様の傾向が認められるという。

以下，重要だと思われる著書と論文を中心に戦前の都市地理学を検討してみよう。

佐々木 (1933) の研究は，銀座・新宿・浅草の商店街の店舗を11業種に分類してメインストリートを悉皆調査 (1933年5月の状況) したものであり，後の商店街研究の原点を見る思いである。佐々木には都市内部構造を官衙・学校・社寺・工場・軍隊の5要素の立地状況から検討した論文 (1934) もある。佐々木の関心は都心にあり，全国の都市 (東京，大阪は含まれない) を調査して，単一都市と複合都市 (2つ以上の都心より成っている) に分けて検討しているが，都心の研究としては充分ではない。

都市の内部構造研究としては，名古屋を分析した鏡味 (1937，1938) と東京を分析した木内 (1941b) の研究に注目したい。鏡味の1937年の論文は，名古屋と郊外を18区分して，建築中の家屋棟数，農家世帯数，荒廃地，娯楽栽培地の4点について生徒に調査させた結果をまとめたものである。それは図1のように提示されている。この論文の冒頭で鏡味は「都市を全一有機として其の成長の變化過程を把握する事が出來，都市の中央から縁邊に向ふに從つて漸移的な又は段階的な變化を見出す事が出來るのである。斯様な事は感覺的に吾人に周知の事ではあるが，何等かの觀察材料を用ゐて實證的に都市なる成長空間に關して成長する個體としての構造を客觀的に決定する事が可能である」と述べている。

1938年の論文では十字街，つまり交差点の景観 (具体的には家屋密度) を調査し，その結果を図2のように表した。そして，Ⅰ　商業中心地域　Ⅱ　商業中心地域の縁辺地域　Ⅲ　中間位置的商業地域　Ⅳ　縁辺商業地域の名称を与えた。

木内の研究 (1941b) は東京の都市密集住宅地区—不良住宅地区の調査を行ったものである。「密集住宅地区は商業及工業 (主として印刷) を機能とする都心，諸官公衙の置かれる地帯を避けて，環状に配置されている」といった結果を導き出した。

この論文において木内はHenry Wrightのアメリカ都市の研究結果を参照し，「第1期中央に商業及輕工業の都心あり，住宅地區が之を周らす。第2期都心區域の膨張，交通機關の整備に助けられ住宅地も外延に擴がる。併し商工業地に發展し損ねた第1期の住宅地は何れの機能をも發揮せざる停頓的地帯となり一部はBlighted area (頽廢化地區) になる。第3期外周への住宅地区の遷移は益々進行し，一方都心に於ては面積的な擴張を止めて，垂直的に發達する。從つて，商工業地として期待された前述の頽廢化域は，一層悪化しSlum (不良住宅地區) を形成するに至る。第4期は各々の地帯に擴張を見るが，但都心のみは高層建築の發達で縮少し，此の縮少部が新に頽化する。此の時期

表2　1945年までに「地理学評論」「地理」「地学雑誌」に掲載された都市地理の論文

	都市地理										交通地理	集落地理	人口地理
	(点的分析)					(面的分析)							
	商圏	分布	居住	分類	都市機能	都市機能	都市誌	居住	内部構造	分類不能			
地理学評論	2	3	1	1	1	1	2	3	13	1	6	7	16
地理	1						2					1	1
地学雑誌					3			2				2	16

1) 複数号にまたがって連続掲載されている論文は1本とカウント
2) 論説と短報論文をカウント。資料などはカウントしていない。

に於ける公稱の地價と土地の實際の値打とは第5圖（省略）に示した様な關係にあり，その開きの割合はcに於て最大となつてゐる。勿論之は模式化した説明で，夫々の都市は地理的にも歴史的にも種々な發展の形態を採るが，兎に角米國の場合は，都心の擴張を見越した中間地帯の土地又は家屋所有者が，面積的發展の頓挫によつて頽廢化の契機を與へられたのであつて，之を其の儘我が國の場合に當嵌める事はできない」と指摘した。

改めて指摘するまでもなく，鏡味の使用した用語のいくつかはバージェスのそれと同じである。鏡味の論文には同心円状という用語も出てくる。しかし，鏡味の論文にも木内の論文にもバージェスの研究は引用されていない。ところで，奥井復太郎は『現代大都市論』（1940，9）の中でバージェスの研究を引用しているので，この著書を通して木内はバージェスの研究を知った可能性もある。木内の論文は7月号掲載なので，この時間差

図1　空間有機體としての都市の構造（鏡味完二　原図）

を考慮するとこの点は微妙なところではある。鏡味の場合は奥井の著書より早いのでこの点は問題にならない。現在と比べて昔は文献の引用に厳密でない点が見受けられるので，鏡味がバージェスの研究を知っていたか否かは不明である。もし，知らなかったとしたら，後述の中心地研究における鳥羽のように独自に高いレベルの発想と研究を行っていたことになる。

戦前の地理学講座としては『岩波講座　地理学』（岩波書店）を挙げる必要がある。この中で都市地理学関連としては，「都市の形態」（西田與四郎（1931a），「都市景観に関する二三の問題」（保柳睦美，1934），「商業地理学」（下田禮佐，1931），そして，集落研究として「聚落」（村松繁樹，1933）の論文がある。

「都市の形態」（西田）では外部形態（輪廓）と内部形態（構造）の二点から，いずれも平面形態と立面形態が論じられている。対象都市は日本の

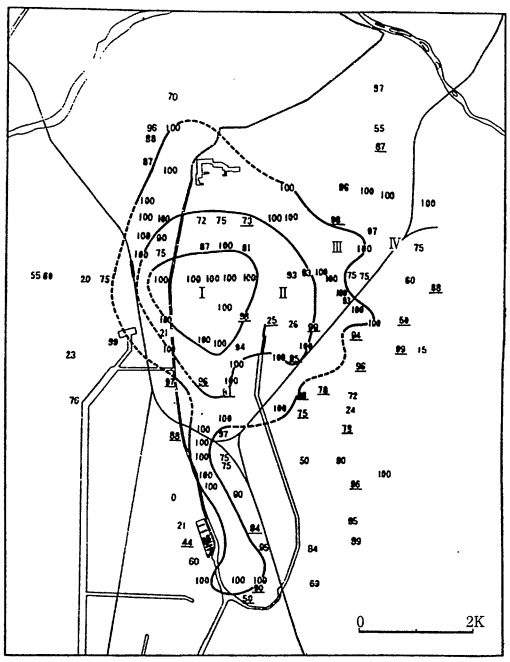


図２　十字街の占める家屋の密度（百分率）
　　数字の下の下線はバラックの存在を示す。

都市のみならず海外の都市も数多くとりあげられているが，論文の主眼は上記二点に最適な都市の紹介と解説である。

「都市景観に関する二三の問題」（保柳）の内容は都市（とくに東京）の内部構造の変遷と外部への膨張の実態分析であり，都市景観に関する問題と言いながら，現在の観点からみれば都市化研究に近い。

「商業地理学」（下田）は現在の商業地理学のイメージとはかなり異なり，その内容は地球的規模でみた貿易の分析である。

戦前の地理学講座としては地人書館の『地理學講座』もある。そこでは西田與四郎が「都市地理」（第５回　1931b）を執筆している。上述の「都市の形態」の冒頭において記述しているように，この２論文は１セットの趣きである。西田はまず都市の種類として９タイプ（政治都市，工業都市など）を挙げ，以下，すべての紙幅がその説明に費やされている。とりあげられている都市は内外に及び，位置，形態，構造の説明が中心である。

西田與四郎は「都市地理学研究法序論」（1934）で都市地理学の研究を分類しているが，それを整理したものが図３である。

西田のこの論文は主として海外の文献紹介であるが，自身の研究姿勢も述べられている。それによると，まず「個別的研究を先にし，ある程度迄解って後概括的研究に進み，同時にグループを見て地域性を考察することが必要である。」個別的研究がなければ概括的研究は進まない，また単純都市から研究を進めて複雑へ進むべきこと，さらに都市を調べる時には個別的研究にしろ，地域的研究にしろ，通論的研究にしろ，①立地論　②形態論　③人口論　④職能論　の４点を調べることが肝心である。立地論については，とくに「地形的位置及関係的位置について考へる事を要」する。職能論とは生活形態の生態学，即ち都市生態論の

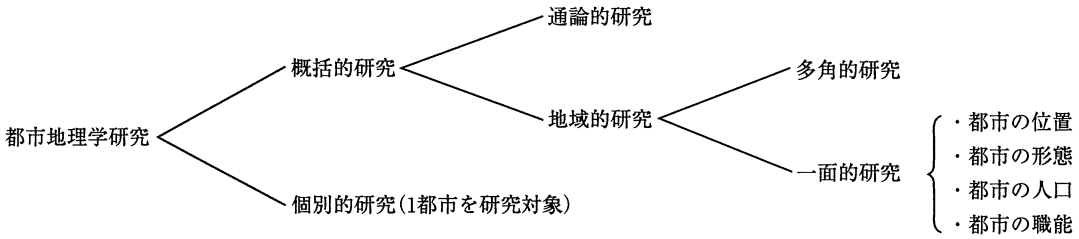


図3　西田與四郎の都市地理学研究の分類

ことで，職能とは機能（function）のことである。大小さまざまな都市圏の研究の必要性が述べられている。

個別研究というのは都市誌と言ってもよいが，その時には都市の位置，形態，人口，機能を調べることが肝要だということでもある。

海外の研究を渉猟して，自己の研究体系を提示した姿勢は評価されよう。西田の都市地理学は「以上之を要するに地表の文化景たる都市を研究するに当り，先づ如何なる地域の，如何なる地盤の上に，如何なる形態をとって広がり，如何にして生存発達して居るかを調べることが必要と思ふのであります」ということになる。ここには一般性，つまり法則性を追求する意図はあったのだろうか。

西田には「鈴鹿峠の集落」（1926）という論文もある。集落地理・都市地理という分野名にこだわれば西田は両方に関心をもっていた人ということになるが，西田には都市地理学は集落地理学の一部であるという認識はなかったように思う。

２つの講座における都市地理学関連の執筆者，西田と保柳の都市への関心を見ると，都市の形態と発生の解明が中心にあったことがわかる。都市研究を点としてみる研究，面としてみる研究に二分すれば，後者の立場である。

引き続き，戦前の代表的な研究者の成果をみていきたい。1907年の『東京人類学会雑誌』第20巻に掲載された山崎直方の「本邦市邑の地理的組織に関する１、２の例」（『山崎直方論文集　後編』古今書院　1931　に再録）を日本最初の都市地理学の論文とする考えもあるが，この論文では村落に対して都会という用語が使用されている。その内容は気候風土や住民の気風と家屋や建造物の構造との関係が随筆風に書かれているにすぎない。

1910年代には小田内通敏著『我が國土』（1913），小田内編『地人叢書　都市と村落』（1914a），小田内著『帝都と近郊』（1918）の注目すべき著作が刊行された[1)]。

『我が國土』は全242ページ中（序を除いて，舊國土，新國土，國土の特殊研究の３章―章という文字はついていない―から成っている），舊國土の章の中に「都會」という節がある。「都會」に割かれているページは10ページであり，その内容は特色ある都會の概説である。「都會といふはぼんやりとした名前であるが狭い處に澤山の人間が住んでいる所だといふ事は誰でも氣が付く。我が國では行政上市とか町とかいふ者をさうよぶが同じく市でも町でも，人口の多少，面積の廣狭，成因に伴ふ街路の形状など實に多様で，（後略）」という文章を見ると都會とは都市のことであると思われる。

『地人叢書　都市と村落』は11人の研究者が内外にフィールドを求めた論文によって構成されている。とくに，統一的なコンセプトは認められないが，論文タイトルに「都市」が入っている論文は３つである。その「都市の變遷」（大類 伸），「中古末期の獨逸都市の發達」（今井登志喜），「欧米大都市の交通機関」（小野英二郎）はいずれも外国の

都市が研究対象である。

編者の小田内通敏（1914b）は「郊外戸塚村の變遷」という論文を寄せている。その内容は東京郊外の都市化であるが，小田内は都会化という言葉を用いている。この頃の小田内は都市化に関心があったようであり，『帝都と近郊』の研究の動機は東京近郊の都市化の進展をみたことに始っていて，この本の研究目的は都市というより郊外農村の研究にある。小田内自身，都市，都會，都會化という用語を併用していて，都市と都會の区別を厳密にはしていなかったようだ。山崎直方が都會という用語を使用しているのを受けているのかもしれない。この頃は都會から都市への用語上の移行期だったのだろうか。

『地人叢書　都市と村落』のもう1つの注目すべき点は6本の外国人研究者の論文の翻訳が掲載されていることであろう。フランス，オーストリア，インドの都市あるいはドイツ，フランスの研究動向の一端が紹介されている。この本に限らないことであるが，戦前の日本の都市研究には外国研究も多く，外国語で書かれた文献がたくさん引用されている。当時の研究者の旺盛な知識吸収欲があらわれている。

1920年代の著書としては小川琢治『人文地理学研究』(1928)，小田内通敏『聚落と地理』(1928)，人文地理學会編輯『都市地理研究』(1929) が挙げられよう。小川の『人文地理学研究』の第二篇が日本の村落と日本の都市である（この論文は雑誌『地球』5巻5・6号に掲載された論文が再録されたものである)。

日本の村落の章は1．緒言，2．家屋構造の差異とその起源，3．荘宅式村落と垣内式村落，4．洪涵地に於ける村落の発達，5．村落に於ける氏神と寺院，6．漁村と山村，7．驛站，河津，湖津及び海津の発達である。

日本の都市の章は，1．村落と都市，都市化作用，2．都市の起源と語源，3．築城市街，4．城下町，5．市場町，6．鳥居前町及び門前町，7．遊楽町，8．軍港町，商港町，鉱山町である。この構成から分かるように，その内容は都市分類とその概説である。

『聚落と地理』は題名どおり，全体的に聚落地理の話であるが，朝鮮と満州研究に言及した2ヶ所において（村落から都市へ）というサブタイトルが付いている章があるが，その内容は実証的ではない。

注目すべきは人文地理學會編輯の『都市地理研究』(1929) である。この本は長短内外（翻訳）の24本の論文と都市地理研究の文献，研究資料，コラム的な記事で構成されていて，極めて興味深い書である。文献は日本語のみならず英独仏語で書かれた研究もリストアップされていて，上述したことであるが，当時の研究者たちの旺盛な知識吸収欲がみられる。

小田内通敏はこの書に「風景形態としての都市－一般人文地理學的考察のために—」と「都市的人口集團の地域的實在—特殊人文地理學的考察のために—」の2論文を寄稿している。風景とはLandschaft, landscapeのことであり，今では景観の方が用語としては一般的である。

後者の論文中に「都市の大小は，概ね其の立ってゐる地域の廣狹に正比例する。(中略) 都市の大小と地域の廣狹との相互関係は甚だ緊密であった」という指摘がある。「あった」と過去形になっているのは，今日のごとく便利ではなかった封建時代においては地域の核としての都市の存在が明確であったという考えに依拠しているのだが，後の都市圏研究の芽があったと評価するのは行きすぎだろうか。

この本には6人の外国人研究者の論文（翻訳）も掲載されていて上述の文献について言及したように，当時の日本の研究者が海外の研究成果に注

目していたことが分かる。

中でも特筆すべきは鳥羽正雄の論文であろう。鳥羽は「中世末期の関東に於ける都市の発生過程」という論文を寄稿しているが，中世の領地分散の状況と中心地集中の具体化たる城館との関係をクリスタラーのように六角形のモデル図に整理している（図４）。『都市地理研究』は1929年２月の発刊であるから，鳥羽がクリスタラーの理論を模倣したということはあり得ない。

関東地方は日本の中で最も広い平野であり，均一的な地理的条件を要求する中心地理論の適用が期待できる地域ではある。工業や大都市の存在が現在より希薄な中世ならなおさらであろう。鳥羽の観察眼に驚くとともに，この着眼が理論化されなかったことは残念である。森川洋（1974）は鳥羽の論文に対して「クリスタラー理論にとり入れられるべきアイデアであったといえよう」と評価

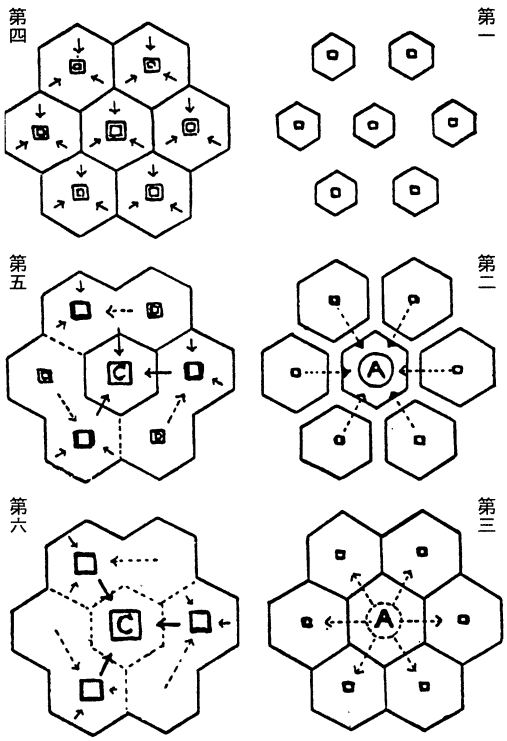


図４　鳥羽正雄　原図

している。

1934年には國松久彌の『都市地理序説』が刊行された。この本は１個人の単著としてタイトルに都市地理という用語が刻まれた最初の本ではなかろうか。全13章から構成されていて，第４章以下の10章が都市地理にあてられている。とはいうものの大部分はヨーロッパと日本の古代・上代から始まる都市の概説である。第４章の「都市景観の概念」は政治都市などの都市分類の記述が中心であり，第５章の「都市位置」は河口都市や海峡都市といった都市分類である。また，國松は都市の職能（functionのことであり，現代では機能という方が一般的である）を重視することを述べているが，それは都市の分類のためである。

続いて取り上げられるべきは奥井復太郎の『現代大都市論』（1940）であろう。これは743ページのまさに大著である。緒論　都市の本質 から始まり，以下，第１章　都市理論・都市社会学，第２章　現代の典型的大都市，第３章　大都市の地域的構成，第４章　大都市社会・其の構成と特質，第５章　都市計畫　という構成である。

奥井復太郎は社会学者である。社会学と地理学をどのように区別するべきか，あるいは区別する必要はあるのかという問題があるが，確かにこの大著を読むと社会学者と地理学者の都市へのスタンスの微妙な違いを感じる。

第２章の第１節は人口を指標とした大都市概論であるが，第２節では東京都市生活圏の調査から東京の拡大が様々な観点から詳細に分析される。「かくの如く大都市の日常生活に於ける勢力は擴大していった。此の日常生活上に於ける大都市の勢力の及ぶ範囲を都市勢力圏または都市生活圏と名づける」とあるように，明確に都市圏研究が意識されている。学生街としての三田，丸の内のビルディング化，郊外化が詳細に分析されている。とくに鎌倉をフィールドにした郊外社会の変質の分

析は詳細である。鎌倉の分析ではふんだんに地名が出てくるが，奥井の視点は鎌倉在住者の属性の分析が中心である。

1960年前後に，日本の都市地理学界は都市化論争を経験する。その時，高野史男は土地利用と就業形態の変容が都市化の指標であると主張した。これになぞらえれば，奥井の鎌倉の分析は後者の詳細な分析であり，都市化研究である。しかし，当時既に都市化・都会化という言葉は使用されていたが，この著書に都市化という用語は出てこない。第4章はまさに大都市社会の分析である。

Ⅲ　都市の勢力圏の研究

続いて都市の勢力圏の研究について言及したい。奥井復太郎も多大な関心を払っていたように戦前において，このテーマにも興味深い論文がいくつか登場している。

川口丈夫の「都市勢力決定因子としての電信電話為替の統計学的研究」(1933) は，まず都市を聚落形態の1つとしつつも村落地域の上位概念として位置づけた。都市は周囲の村落領域に影響力をもち，それを都市力でもって自己に固有する生活圏となすという考えである。都市圏の存在とその研究の重要性を指摘して，貨物と電話・電信・為替の相関係数がきわめて高いことを提示した。そして，これらの交互の組合せによって勢力圏の地域的限界は容易に決定されると述べている。論文中にその限界は図示されていないが，計量的手法を駆使し，都市の勢力圏・生活圏・商業圏を正確に認識することの重要性に言及している。さらに，勢力圏の広狭が中心都市のあり様に影響するはずであるから，益々様々な都市勢力圏の研究をすすめるべきであると結んでいる。

田中啓爾 (1927) は「多摩御陵附近の地誌」(田中啓爾『地理学論文集』1933に再録) の中の「市場商業とその商圏」において八王子の織物市の商圏を移入圏と移出圏の二面から分析している。これは現在的な意味での商圏ではなく，商品の流通圏の分析である。

佐々木彦一郎 (1928) は朝鮮半島をフィールドとして定期市の市場圏調査を行った。そこで中心市場から各市場までの距離を測定している。

川口，田中，佐々木の研究を受けて磯崎優 (1933) は興味深い研究を発表している。磯崎は大宮・浦和・與野・蕨を中心とする地域で商圏の実証研究を行ったが，その動機は「都市の商圏に関する従来の多くの研究が他の都市との商圏境界即ち範囲を主として取扱ひ，其の境界内の強弱は余り注意されず，其の境界内では一群と見てその平均値のみを考へたかの處がある」というものである。

磯崎はまず，日用雑貨品とその他，醤油・砂糖・酒飲料水・八百屋物・鮮魚・菓子類と日用荒物雑貨・日用小間物，呉服雑貨・化粧品・文房具をとりあげた。これらを卸売商店で小売商店への卸売状況を調査するが，失敗して，反対に個々の小売商店の卸売仕入れ先を調査（1．主として何町より卸されるか，2．各町殆ど等分か，3．何町からは殆ど卸されないか）した。そして，まず商品ごとの商圏を描き出している。商品により商圏のレベルが異なることを商品ごとにその距離を算出したのである。たとえば豆腐屋の商圏はほぼ3～3.5kmである。

磯崎はさらに，配給商品数の多少を以って都市の商業力とし，商業力とはある都市と村落小売商店との連緊を示すものとした。さらに依存率を求め，それを連緊度と呼んだ。

各都市の商圏は当然のことながら中心都市から離れるに従って影響力が弱くなるが，磯崎はそれを複数の商圏の集合ととらえ，たとえば大宮ではほぼ1.7kmと3.5kmに境があると測定した。そして，商圏の半径は算術級数的に増加するらしいと考え，「即ち第一商圏半徑をaで示し其の半徑距離

増加をｒとする時第ｎ商圏の半径Rn=a+(n−1)rの如き傾向を持つものではあるまいか。即ち大宮・浦和・與野・蕨を通じて略第一商圏の半径は一・七粁、第二商圏の半径は三粁、第三商圏の半径は四・二粁でｒは略一・二粁——一・三粁である」ことを導き出した。

磯崎は慎重に，この結果が日本各地にあてはまるか否かは今後の課題であるとしながらも，ドイツの東部においてVolz, Schwalm（1929）の研究を参照すると，両者はきわめて類似した結果をもつことをつきとめた。そして，「猶上に述べた商圏は必しも同心圓的に發達することを意味しない。多くの場合は中心を共有せざる楕圓状である。今問題を簡單にするためこれを圓と假定すれば、都市勢力波及を示す配給度より各商圏に屬する各點へ都市から引いた直線をVectorと考へ、各商圏ごとに夫々Vectorを考へ、これと各Vectorとの和を、殆んど一定たらしめることが出來る。この際加へられた一つのVectorは、各商圏の非對稱度を示すものである」という。

1930〜1932年の調査に基づいて書かれたこの論文はクリスタラーの理論まで，あと一歩であると言えば評価しすぎだろうか。

Ⅳ　石川榮燿の研究

続いて石川榮燿の研究を紹介しておかなくてはならない。石川は愛知県庁，そして後に東京府の職員を経て早稲田大学の教授となったが，戦前において極めて興味深い研究をいくつか残している。

とくに『都市動態の研究』（1932）は愛知県の５大都市（名古屋，豊橋，岡崎，一宮，瀬戸）をとりあげて，①研究の對象とせる各都市の發生原因及都市内容　②都市展延の態容及偏倚　③都市展延の速度　④展延に伴う内現象　⑤都市展延に及ぼす影響　の５点から研究したものである。都市を１つの有機体的構造物とみなし，その外側への成長を同心円的にとらえ，距離と人口と交通機関による説明を試みているのは圧巻である。

都市内の人口は平衡状態から，都市の発展につれて遠心運動をするようになり，その初期に周溢性展延をみせるようになる。つまり，人口が外側に溢れるようになるわけだが，その多くは工業労働者である。そして，「周溢性の膨張が或る発達を遂げると副射が始まる」と考えた。以下，彼の著書から直接引用しよう。

「周溢性の膨張が或發達を遂げると副射が初まる。此の副射始點として當然前述場末帶の發達及その限度が問題になる。

場末帶の性質如何。

此に對しては自分の極めて粗雑なノートが昭和六年度『都市公論』に乗せられてる。其の稿の要旨は（名古屋、横濱、東京等を基礎として）次の如くである。

一、場末帶は細民街を核として勞働家屋、下級小賣商店，小工場等を以つて過密に混成されている極めて居住心理的に畸形なものである。

一、場末帶の厚さは重心からその外皮迄徒歩距離七、八町である。

一、場末帶は都心部から七、八町乃至三十一、二町の間に存在し動かない。（彼等の生活の徒歩的である可き所から）

一、場末帶は當初は都市をめぐつて環状形成をして居るが、やがて此は偏在してしまふ。偏在の位置は高級住宅部と對蹠的な部分である。

一、場末帶の密度は高級住宅地のそれと違つて頗る濃い。従つて展延速度は遙かに前者より遅い。或時は二対一の比以下になる。

勿論此は場末帶の張り切つた、最大限度に於ける形であると見なければならぬ。

依つて市中心部よりの周溢人口の群が環状を成しつゝ其の場末帶を此の限度に迄押しつめた時（イ参照）それは二つに分かれ一は場末帶に外接漸溢

し（前章の周溢を内溢とし、此れを外溢と稱し區別するのも便利であらふ。又外溢と場末新層とは明に殊別しといた方がよい。周溢部は要するに純粋状態に近き普通居住群と考へたい）他は副射を初めるのである。（ロ参照）

此の時の人口は次の計算により推定される。」（後略）

見事な同心円理論ではないか（図５）。しかし，石川は「都市の展延は決して同心円的に八方に均等には進むまい—と云ふ事は想像される」と考えて同心円的発展を偏倚させる要因を考察している。

「Adshead—Town Planning and Town Development の説を抜けば『都市の展延は先づその丘陵部へ高級住宅を拆出する事に初まり、次で丁度其對蹠側の低地へ勞働住宅群を造成する。其の頃高級住宅地帶と都心區との間には特殊な辯護士、醫師、建築師と云ふ様な特殊技術の專問家の事務所が出来初めてる』

たゞ然し此の説にはベルリン、ロンドン、巴里等の例により『高級住宅地は河上にも昇る』と付け加へなければなるまい。要するに風致よき可住地へ移るのである。（ウィーンの如きは明に丘陵地ウイーネールワイドを指して展延してる）

何れにせよ工業勞働者群が、その對側に地帶を成す事は此等の場合もアドシエット氏所説を裏書してる。

此等外國都市の展延偏倚を見るとそこに又次の共通態容がある事を知る。

一、高級住宅の展延は速度急。然し密度疎。

一、勞働住宅群は對側にあり全市最高密度の核を抱擁してる。

これらの点を名古屋ほか４都市にあてはめて、以上五都市考察の結果より新に次の結果を得た。

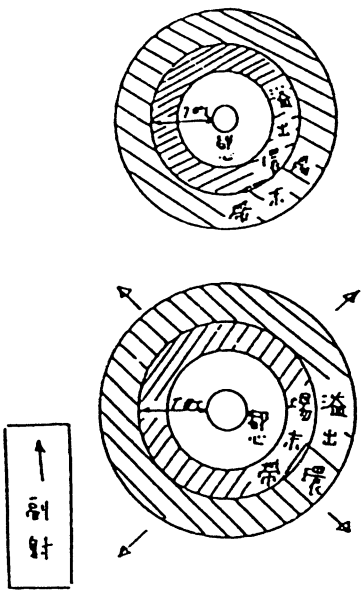
一　大都市と小都市は偏倚の順序を異にする。大都市は向丘（或は向住宅適應地）第一、小都市は向低地（或は向交通中心或は向工業地）第一である。

二　偏倚に自然偏倚と人為偏倚とある。自然偏倚は住宅群の為の向丘的のもの、人為偏倚は交通中心の完備等に伴ふ偏倚である。後者は當然多くの場合工場群を引き寄せるから此は向工業地性のものと同じだと云ひ得る。尤も自から特殊の原因もなく工場群が集團し偏倚を呼ぶ場合もあるであらふ。（水質等の原因で）その場合は自然偏倚になる譯である。

三　此の自然偏倚を純粋偏倚と見るならば都市は矢張り多くの場合東漸性を有つて居る。然して南北へは地形上岡崎の如く、その線上に近く都心のある場合でもない限り伸びが鈍ぶい。

四　向住宅適應地への展延は神速であるが、向

（イ）



（ロ）

図５　都市の展延モデル（石川榮燿　原図）

工業地へのそれは頗る遅い。」

見事な分析と言えよう。

バージェスのThe Growth of the City は1925年，The determination of Gradients in the Growth of the City は1927年の出版である。『都市動態の研究』は1932年の出版だが，石川はバージェスの研究を知っていたのだろうか。この本の中にはそれを知る手掛りはない。

木内信蔵は『都市地理学研究』(1951) と『都市地理学原理』(1979) で石川の研究を紹介しているが，それは『皇國都市の建設』(石川榮燿，1944) のみを簡単に紹介しているにすぎない。しかし，この書と『都市動態の研究』はもっと注目されるべきである。

戦前では西田與四郎 (1934) がこの石川の研究を「展延の偏倚について数量的に調べて若干の法則的な事をのべていますが可なり有益な研究であります」と評価しているが，戦後，都市地理学の教科書的書物は何冊も出されているが，石川の研究は取り上げられていない。石川は都市地理学者というより都市計画者として評価されていたからだろう。

続いて，『皇國都市の建設—大都市疎散問題—』(1944) をみていこう。全468ページにわたるこの大著は，3篇16章51節で構成されている。この第1篇は大都市疎散論であるが，大都市の疎散というのは「大都市の機能、家屋及人口等の密度を疎にし（疎開）尚かゝる状態に導く為に、それ等の都市要素を都市圏（之れはその都市の有つ通勤圏と云ふ様な意味に解して—後出生活圏）の外に分散せしめ、又都市を適正規模に解體する。此の操作を併せたものが疎散なのである。」

この出版が戦時中ということを考えれば，防衛・防空上の必要から大都市を解体することが急務であったろう。またそれは新しい都市を計画的に建設するということを意味したであろう。その時に抽象的とはいえ皇國の精神をもってこれにあたるということであったかもしれない。

現在の私たち都市地理学者にとって注目すべきは，第2編　皇國都市の建設　の第3章　皇國都市の生活圏的配置と第4章　都市生活圏論考　である。とくに第3章は重要である。

第3章は5節構成で70ページから成る。まず，関東平野・濃尾平野・摂津平野の都市分布を観測すると，そこに一定の序列がみとめられるという。関東平野におけるそれを示したものが表3である。

三位・四位・五位都市というのは中心地理論の用語でいえば，第3・4・5階層の都市である。そして，最上位の主位都市の生活圏の最大は半径150kmとしている。

そして，この観測を実証すべく，東京－宇都宮間の一帯と名古屋－岐阜間の一帯で次のようなア

表3　関東平野における都市序列（表題は引用者による）

首位都市	副位都市	三位都市	四位都市	五位都市
全平野一五〇粁内外の半径	五〇粁内外の半径	十五粁内外の半径	五粁内外の半径を有つもの	二粁内外の半径を有つもの
東京（京濱）	水戸 宇都宮 前橋 甲府 沼津 順ずるものとして 銚子	主位都市の衛星都市千葉，松戸，大宮，川越，八王子，横須賀，平塚，小田原。次位都市の姉妹都市。水戸圏，土浦，日立。宇都宮圏，栃木，佐野，足利。前橋圏，熊谷，秩父，桐生	主位より三位の都市に夫々従属し主位次位に對しては衛星都市となる。その形明なるものを例示すれば左の如し。水戸圏，那加湊，日立圏，多賀高萩。土浦圏，石岡，龍ヶ崎。宇都宮圏，眞岡，氏家，鹿沼。栃木圏，結城小山，田沼，前橋圏（高崎を含む），伊勢崎，桂萱，富士見，滝川，富岡，藤岡本庄。熊谷圏，忍，深谷。川越圏，所澤，飯能，八王子圏，青梅，立川，府中。 以下略	四位都市の下位都市。（必ずしも四位に従属せず。）略す。

表4　日本學術振興會生活圈調査表

一　住所(氏名は不要です)　　縣　　市　　郡　　町　　番地
村字

二　家業又は職業　　三、家族人員　　人、内　通　勤　者　　人
中等學校以上の通學者　　人

四　通勤

(1)通勤される方の通勤先は何所ですか。(地名だけ)　市　町　市　町
郡　村字　郡　村字

(2)通勤先は何業ですか。(○をつける)　工場、商店、銀行、會社、其他　工場、商店、銀行、會社、其他

(3)通勤には、どんな交通機關を使はれますか。又徒歩ですか。

五　商事

(1)家業の關係から送品、配達、注文、仕入、打合等の為主として何所に出掛けますか。　市　町　市　町
郡　村字　郡　村字

(2)右用務は大體月何回位行かれますか。　月　回位　月　回位

六　教養

(1)講演會、展覧會等に行かれる時は何所で開かれた時に行かれますか、大體月何回位行かれますか。　市　町　月　回位
郡　村字

(2)何所の圖書館を主として利用されますか。大體月何回位行かれますか。　市　町　月　回位
郡　村字

七　医療

(1)重病人が出た時は何所の病院に入院されますか。又入院されましたか。(地名だけ)　市　町
郡　村字

(2)市郡町村其の病院は下の何れに當りますか。(○をつける)　官立　公立　赤十字社　私立

八　買物

(1)下記日用品は主に何所で買はれますか。

野菜類	市	町
	郡	村字
魚肉類	市	町
	郡	村字
酒、醤油類	市	町
	郡	村字
菓子類	市	町
	郡	村字
紙、荒物類	市	町
	郡	村字

(2)下記の品物主には何所で買はれますか。

衣料品(着物洋服等)	市	町
	郡	村字
雑貨類(シャツ、帽子等)	市	町
	郡	村字
家具類	市	町
	郡	村字
陶磁器類	市	町
	郡	村字
農具肥料類	市	町
	郡	村字

(3)嫁入り支度は何所でされますか、又は御近所は一般に何所でされますか。　市　町
郡　村字

(4)時計、眼鏡等貴金属類は何所で買はれますか。　市　町
郡　村字

九　慰樂・其他

(1)映畫や芝居を見に行く時は何所の劇場に行かれますか、大體月何位いかれますか。　市　町　月　回位
郡　村字

(2)神社參拝、佛寺參詣、遊覧、買物等に出掛けられる時は主として何所に行かれますか。大體何回位行かれますか。　市　町
郡　村

(3)彼岸、盆、正月、農閑期等には主として何所に行かれますか、其の時の主な御用は何ですか。　月　回位又は　年　回位
市　町
郡　村

表5

圈半徑	家庭消費	娯樂教養	勤勞
二粁	取りあへずの必要品（日常）		通學、國民學校
五粁	家庭用品（日常）		同左
十五粁	同上重要品（週末）	週末娯樂（週末）	通學、中等學校通勤（日常）
五十粁	稀貴品（月末）	教養（月末）	商務（週末）
百五十粁	特別品（季末）	高度教養，大慰樂（季末）	重要事務（月末）

表6

	政治機能	經濟機能	特に工業部門	學校級別
二粁	村中心都市			國民學校
五粁	郷中心都市（町村共同體中心地）	經濟機關の出張所所在	手工業地	職業學校
十五粁	地區中心都市（地方事務所々在）	經濟機關の支部所在	協力工業工場地	中等學校
五十粁	地域中心都市（縣廳所在）	同上の地方綜合體所在	地方工業基地	專門學校
百五十粁	地方中心都市（行政協議會所在）	同上の中心地（決濟地）	工業基地	大學

表7

人口	圈半徑	都市任務	機能		
			商	工	文化
五〇〇	二粁	村中心	雜貨屋		
一、五〇〇－二、〇〇〇	六粁	市場中心	食料品	家庭向工業	國民學校
			身の廻り品		醫者
			實用品		
五、〇〇〇			趣向食料品	大規模家庭向工業	職業學校
			文化品	自動車屋	映畫館
			長持品	石炭屋	
一五、〇〇〇			奢移品	建築向工業	中等學校
			上級家具	印刷業	
				食品工業	
二〇、〇〇〇	一八粁	地區中心	金融支部	都市工業	市役所
				消防支部	
五〇、〇〇〇	五四粁	郡中心	金融本部	消防本部	郡役所

ンケート調査を実施している（表４）。

その結果は一覧表（省略）として整理され，主位都市としての東京と名古屋は日常生活圏として，それぞれ半径70kmと40kmの圏域をもつこと，副位都市としての宇都宮は同30km岐阜は同20kmの圏域をもつとした。各指標によって数値は異なるので，これらは平均値である。以下，同様に下位都市まで平均のkmが算出される。

以上は「主として都市の序列に応じて整理したのであるが、生活機能自體を主として整理して見ても結局同じ結果を得る事になるわけである」と書いているが，これは明らかに都市機能の到達範囲の概念である。そして，「よつて此れによつて結論を得れば『生活機能は大體に於て都市の大小に論なく總ての都市に於て何等かの形式で一通り備はつて居る』と云ふ事と『その夫々の都市に於ける半徑は殆相等しく、それは結局その都市の支配圏に合致する』と云ふ事になる」と結論づけた。

石川の着想にはモデルがあったようである。それはドイツのメクレンブルヒ地方と東プロシアにおいて研究したフェーダア教授の『新都市』という著作らしく，石川の算出した数値とフェーダア教授の数値が比較されている。

さらに石川は生活圏の半径と中心都市との間に一定の関係があることを論証しようとした。

都市計画者としての石川栄耀はこれにとどまらず，計画的に生活圏を画定しようとする。その時に重要な点は，機能の定立，圏半径の付与，都市人口の配布であり，「機能の定立により各中心の段階附けが生じ、そこに充備すべき機能内容が明にされる。

次で之れを配置する距離が與へられ、最後に夫々の都市の保有すべき人口が吟味されて一應了するわけになる。」

人間の移動は中心地に達するまでの使用交通機関として，徒歩にて（2km），自転車にて（10km），バスにて（20km），電車にて（50km），汽車にて（100km）と考えられる。

「此の中自轉車到達の日常中心を、徒歩の場合をも併せ考へて平均五粁、週末中心のバスには餘裕を與へて一五粁とする等全體の構成上都合好き様修正すれば、第一次日常中心二粁、第二次日常中心五粁、週末中心一五粁、月末中心五〇粁、季末中心一五〇粁となす事が出來る。

之れにより生活圏的割り當てを爲せば、（表５）と云ふ様な事になる事が考へられる。

尤も之れもその圏中心に於て初めて之れ等のものが出現すると云ふのでなく、此こに記された規模の圏中心に於て初めてそれ等が一應完備した形式になると云ふ事を意味するので、總ては現實に照應し之れを整理したに過ぎない。

之れに上位的な政治、經濟上の國土計畫的任務を與へれば次の如くなる（表６）。

之れも云ふ迄もなく現實の修正である。之れ等の設計の場合最も重要な事は先づ

人々の必要なる生活の類別

その夫々の所要頻度、その大別、

大別せる頻度に應ずる許容距離

と云ふ様な事の決定で、上記は之れを現實の生活圏に照應せしめ、修正したに過ぎないものである。

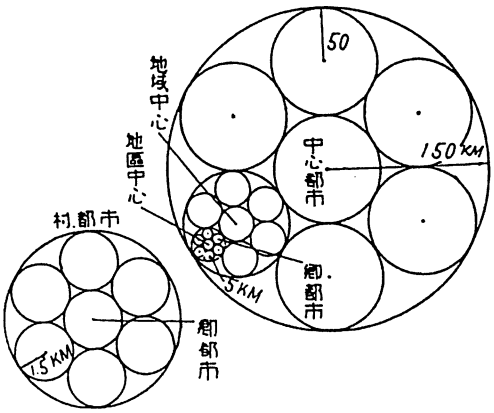


図６　石川榮燿の都市配置モデル（引用者による）

之れ等に關し獨逸國土計畫學者の或る者は、人口別に次の様な機能を與へよとして居る（表７）。機能の分化については多少の示唆なしとしない。

次で之れ等に對する設計は、先づ百五十粁圏を描き、總中心を決定し、次でその内部に五十粁圏を内接せしめ、夫の中心を第二次中心とし、更に之れを十五粁圏に分かち、十五粁圏を五粁圏に、五粁圏を一・五粁圏と云ふ様に分割してゆくのである。

その結果重要中心は總てその下位の中心を重合せしめることになる（図６）」（表５・６・７，図６の挿入とタイトルと番号は引用者による）。

以下さらに，上位中心都市は下位の都市の所有する機能をすべて所有し，従って人口の総和も各階層ごとに計算されることが述べられる。そして，この考え方を調査区域に適用すると，総てが整然とすることを指摘し，関東平野と濃尾平野について，その図を作成した。

改めて指摘するまでもなく，これは明らかにクリスタラーの中心地理論と基本的に同じ考えである。石川はクリスタラーの研究成果を知っていて援用したのであろうか。上述の「独逸國土計畫学者の或る者」とはクリスタラーのことであろうか。この本には引用文献というものが皆無な為，真偽は不明である。紙幅の関係もあり，ここにはすべてを引用しないが，石川の著作の中にはたくさんの六角形状モデル図が描かれている。

上の長い引用は1944年発刊の『皇國都市の建設』からであるが，この著書の中でクリスタラーの中心地理論と重なり合う着想の部分は『都市及び国土計画』（産業都市株式会社　1941）のpp38～41，「国土計画方法試論　本邦都市発達の動向と其の諸問題（下）」（第７回全国都市問題会議，総会文献・研究報告２，全国都市問題会議事務局　1940.10），「国土計画の最終課題たる「生活計画」について」（『農村工業』第８巻第２号，農村工業協会1941.２），「国土計画――生活圏の設計」（『河出書房科学新書』38．河出書房1942.8）である（後者３論文は『石川榮燿都市計画論集』日本都市計画学会発行　1993　に収録）。クリスタラーの著作との時間差にこだわれば，なお７～８年の開きがある。

既述したように愛知県庁に勤務していた石川は1933年9月に東京府に転勤となった。愛知県時代の石川の仕事は区画整理が中心であったが，東京ではもっと包括的な仕事に従事していたようである。上記に引用した石川の研究は東京時代以後の研究の成果であるが，都市計画者としての石川の憧れはアーウィンであった。公刊されて暫らくの間，どちらかと言えば否定的な評価の方が多かったらしい地理学者クリスタラーの理論を日本の都市計画者の石川が知っていた可能性は小さいと推論する。クリスタラーの着想は都市立地の法則を追求することにあった。石川の着想は現実の状況をふまえて，合理的な都市配置を計画することにあった。

この点について，戦前の中心地理論の日本への伝播の可能性を検討した杉浦芳夫（1996）も石川がクリスタラーの著作に目を通した可能性は小さく，また彼の生活圏シエーマへの中心地理論の直接的影響はみられないと推論している。石川が影響を受けたのはハワードの田園都市論やフイーダの新都市論であったと書いている。

石川はクリスタラーの理論を知らなかったであろうという筆者の推論が正しければ，クリスタラーとほぼ同時代に優れた着想の日本人研究者がいたことを高く評価したい。そして，石川の研究が戦後の日本の中心地研究の中に受け継がれてこなかったことを残念に思う。

初期の日本の都市地理学者が石川を知らなかった訳ではない。木内信蔵は『都市地理学研究』の初版（1951）で『皇國都市の建設』に言及しているし，増補版（1957）では「先日急逝された石川

榮燿博士は理想派であり同時に実行派でもあったが，地理学者の意見をよく聞き，又我々には計画をやってみよと勧めておられた」と書いている。この増補版に付加された「最近の動向と課題(1951－55年増補)」では初版に比べてクリスタラーの研究についての紹介が多いにもかかわらず，石川の業績そのものについては言及されていない。筆者がみる限り，早い時期に石川の研究を紹介している都市地理学者は渡辺良雄（1971）と沢田清（1978）である。それでも1970年代に入ってのことである。

V　まとめ

田辺健一（1975）は1930～1939年を日本の都市地理学研究の第1隆盛期と規定した。1937年の日本地理学会秋季大会では「都市地理に関する諸問題」というテーマでシンポジウムが開かれたほどである。山田誠（1979）によれば，戦前日本の都市地理学的研究は100をこえる文献があるという。

奥井復太郎（1940）によれば，戦前のわが国における都市研究の第1期は明治21年以降の明治時代で，第2期は大正年間であるという。第2期は後藤新平が東京市長になって以後，アメリカの都市学者を招へいしたことなどが大きいという。これらは必ずしも都市地理学の分野ではないが，筆者（1991）も1920年代～1930年代前半は日本の都市システム形成の重要な時期であったと位置づけたことがある。大きな変化，とりわけ大都市の著しい成長が研究者の関心を集めたのではなかろうか。決して少なくはない都市研究の成果がそのことを物語っていると言えよう。

以上，戦前の都市地理学研究を見てきたが，それを要約すると次のように言えるだろう。①都市分類と都市形態の研究が中心であった。ただし，都市の景観的側面については余り研究されていない。②海外での研究動向ならびに外国都市への関心と知識吸収欲が大きかった。③都市研究を点と面で分ければ後者の方が多い。そして，1つの都市の詳細な分析，つまり都市誌的研究が多い。④より早い時期には「都市」ではなく「都會」また，「都會化」という用語も使用されていた。⑤都市を研究していた者は自身の研究を集（聚）落(地理学)研究の一部とは考えていなかった。⑥鳥羽や磯崎，石川の研究はクリスタラーの研究水準に迫るものであったし，鏡味や石川の研究はバージェスの研究水準に迫るものであった，といった諸点を指摘できる。

この小論を本年度で京都大学を退官される石原潤先生に献呈いたします。

注

1）小田内通敏の地理学については，山田誠（1986）を参照

参考文献

阿部和俊（1991）：『日本の都市体系研究』地人書房，323 p.

石川榮燿（1932）：『都市動態の研究』刀江書院，125 p.

石川榮燿（1944）：『皇國都市の建設－大都市疎散問題－』常盤書房，468 p.

磯崎優（1933）：地方都市の商圏に関する一考察．大塚地理学会編『大塚地理学会論文集　第2輯上』大塚地理学会，355～390.

今井登志喜（1914）：中古末期の獨逸都市の發達．地人学社『地人叢書　都市と村落』，57～78.

小川琢治（1928）：『人文地理学研究』古今書院，282 p.

奥井復太郎（1940）：『現代大都市論』有斐閣，743 p.

小田内通敏（1913）：『我が国土』長風社，242 p.

小田内通敏編（1914a）：『地人叢書　都市と村落』地人学社，228 p.

小田内通敏（1914b）：郊外戸塚村の變遷.『地人叢書　都市と村落』地人学社，45～56.

小田内通敏（1918）：『帝都と近郊』大倉研究所，215 p.

小田内通敏（1927）：『聚落と地理』古今書院，311 p.

大類伸（1914）：都市の變遷.『地人叢書　都市と村落』地人学社，17～44.

小野英二郎（1914）：欧米大都市の交通機関.『地人叢書　都市と村落』地人学社，135～137.

鏡味完二（1937）：都市の成長構造．地理学評論**13**，375～391.

鏡味完二（1938）：十字街の景観－名古屋市の例－．地理学評論**14**，693～706.

鏡味完二（1939）：生産と販売とからみた名古屋市－都市機能の研究－．地理学評論**15**，35～63.

川口丈夫（1933）：都市勢力決定因子としての電信電話為替の統計学的研究．大塚地理学会編『大塚地理学会論文集　第1輯』大塚地理学会，68～98.

木内信蔵（1941a）：都市地理学に於ける二、三の問題と本邦都市地理研究の最近の趨勢．都市問題**32**－3，45～59.

木内信蔵（1941b）：都市密集住宅地区の地理学的研究序論－特に東京市に於ける分布について－．地理学評論**17**，555～576.

木内信蔵（1951）：『都市地理学研究』古今書院，435 p.

木内信蔵（1979）：『都市地理学原理』古今書院，380 p.

佐々木彦一郎（1928）：市場圏の地理的限界．地理学評論**4**，764～773.

佐々木彦一郎（1933）：東京の都心調査．地理学評論**9**，755～765.

佐々木彦一郎（1934）：都市の構造形態の一分類．地理学評論**10**，882～891.

佐藤弘（1929）：獨逸の居住形態．地理学評論**5**，237～254.

沢田清（1978）：『日本の都市圏』古今書院，335 p.

下田禮佐（1931）：商業地理学.『岩波講座　地理学』岩波書店，54 p.

人文地理學会編輯（1929）：『人文地理學報　都市地理学研究』刀江書院，270 p.

杉浦芳夫（1996）：幾何学の帝国－わが国における中心地理論受容前夜－．地理学評論**69**（Ser. A），857～878.

田中啓爾（1929）：多摩御陵附近の地誌（関東西部山麓地帯の研究）.『地理学論文集』古今書院，（1933）に再録.

田辺健一（1975）：日本における都市地理学の発展－都市地理学研究者の研究系譜を通して－．東北地理**27**，189～196.

鳥羽正雄（1929）：中世末期の関東に於ける都市の発生過程.『人文地理學報　都市地理研究』刀江書院，75～92.

西田與四郎（1925）：支那の都市．地理学評論**1**，635～669.

西田與四郎（1926）：鈴鹿峠の集落．地理学評論**2**，493～503.

西田與四郎（1930）：フランスの都市の位置．地理学評論**6**，676～679.

西田與四郎（1931a）：都市の形態.『岩波講座　地理学』岩波書店，41 p.

西田與四郎（1931b）：都市地理．地理学詳論**21**，『地理学講座第5回』地人書館，203～248.

西田與四郎（1934）：都市地理学研究法序論．大塚地理学会編，『大塚地理学会論文集　第2輯（下）』大塚地理学会，101～112.

保柳睦美（1934）：都市景観に関する二三の問題.『岩波講座　地理学』岩波書店　51 p.

村松繁樹（1933）：聚落.『岩波講座　地理学』岩波書店，100 p.

森川洋（1974）：『中心地研究』大明堂，457 p.

安田初雄（1939）：高田市の景観．地理学評論**15**，509～523.

山口彌一郎（1935）：街村地方都市調査の一方法－例宮城県亘理町－．地理学評論**11**，407～417.

山崎直方（1907）：本邦市邑の地理的組織に関する１、２の例．東京人類学会雑誌20,『山崎直方論文集　後編』古今書院（1931）に再録．

山田誠（1979）：都市研究と地理学．日本史研究200, 101～124.

山田誠（1986）：小田内通敏と都市地理学．水津一朗先生退官記念事業会編『人文地理学の視圏』大明堂, 89～98.

渡辺良雄（1971）：中心地と階層性と国土．木内信蔵・藤岡謙二郎監修『講座　都市と国土２　田辺健一編　国土の都市化』鹿島出版会，110～111.